

訪中 新支援策が後押し

旅 不信解く 孤児残留

全国に暮らす中国残留日本人孤児45人が「中国人民に養育の恩を感謝する中国訪問団」を組織し、11月初めに訪中した。命を救い、育ててもらった感謝の気持ちを伝えるためとした旅を、孤児らが自ら企画するのは初めて。誤解に基づく中傷も受けてきた孤児たちは悲願を果たし、「これから本当の日中友好に役立ちたい」と誓い合った。

訪中団は、衆議院議員、弁護士ら、秋田から鹿児島までの孤児の代表計60人。2千人を超える孤児らが02年から老後の生活保障を求めて全国で裁判闘争に立ち上がった。未だに勝ち取った新支援策が昨春から実施されて実現した。

今回の訪中が悲願だったのは、中国東北3省などで「育ての親を忘れた」「恩知らず」などとする声が続々と聞かれていたからだ。新支援策実施以前は、約7割の孤児が生活保障で暮らし、海外に出かけると保護費が支給されなく



自ら案内する温家宝首相(右)と談笑しながら中南海を歩く中国残留日本人孤児たち。11日、中国・北京。大久保亨す

中国残留邦人らへの新支援策 老後に尊厳をもって安心して暮らせることを目的に、08年4月から実施されている施策。主な柱は、国民年金の満額給付(月6万6千円)▽納付した国民年金保険料の払い戻し▽生活支援金の給付(月最高8万円、配偶者がいる場合は同12万円)▽住宅費、医療費、介護費などの支給。ただし、厚生年金などの収入は7割が収入認定を受け、その分生活支援金が減らされる。

日本での苦境に理解進む

訪中団の動きは中国のテレビや新聞で連日大きく取り上げられ、中国社会の孤児らへの誤解を解く一歩となった。孤児問題に30年近くかかわってきたハルビン市紅十字会の胡曉雲会長補佐も「なぜ日本に帰ったままで連絡も取らない孤児がいるのか」という事情が今回初めてわかった」と話した。

なるため、養父母の見舞いに思うように行けない状況だった。中国側の親族には日本語が不自由な孤児が日本で悪戦苦闘していることは想像できず、また孤児も厳しい現実を養父母に語ることはできなかった。そのため、豊かな日本に帰国したのになぜ訪中しないのかと不信感を強くしがちで、4年ほど前には黒龍江省のテレビや新聞で病気の養母と連絡を絶つていた孤児を非難する報道が相次いだ。当時、取材を受けた訪中団団長の池田澄江さん(66)東京都は「多くの孤児が気持ちがあっても訪中できなかった。区切りがついたらみなと養父母感謝の旅に出ると決めた」と振り返る。一行は9日に、最も孤児が多かった黒龍江省の省都ハルビン市で養母や地元政府関係者らを招き、「中国人民に養育の恩を感謝する交流会」を開催。11日には北京で、ふだんは外国の要人しか招かれない中南海で温家宝首相と面会し、感謝の気持ちを伝えた。

訪中団のひとり、石川千代さん(76)高知市は「恩知らず」と言われている状況が今回の訪中で変わればうれしいと話している。(編集委員・大久保真紀)

池田澄江さんと菅原幸助さん

岩波ホールで映画『嗚呼 満蒙開拓団』が上映中の7月、毎週水曜日に羽田澄子さんが聞き手になり、関係者からお話を聞く会があった。その第1回のゲストが右の記事の菅原幸助さんだった。

2回目为上の記事の池田澄江さん。温首相と腕を組んでいる女性だ。残留孤児裁判でも先頭に立ち、映画の冒頭のシーンにも登場している。

3回目の方正で亡くなった約4500人の焼却を手伝い、映画でも登場した吉泉照雄さんは、「歴史検証の旅」にも参加。ちなみに本誌表紙写真の左に本人が映っている。

4回目葛根廟事件で奇蹟的に生き延びた百数十人の一人、大島満吉さん。

5回目元残留婦人で、NPO法人中国帰国者の会会長鈴木則子さんだった。

東京新聞 8月20日付朝刊

中国残留孤児には「菅原」姓が少なくない。しかし、血縁関係はない。「日本の戸籍を作ったとき」「先生の名字を下さい」と言われ、いいよって言ったら、ドンドン増えちゃって」

菅原 幸助さん

十四歳のとき満州へ。終戦の夏、ソ連が参戦した日に憲兵に任官。軍人としての家族が乗った避難列車を護送する特命を受けた。列車が襲われ荒野に置き去りにせざるを得なかった母子。その情景が悪夢のように頭にこびり付いて離れなかつた。それが孤児問題と向き合う原点に。十四歳。(白井慎一)

